

ソクラテス「不知の自覚」の問題点

～プラトン「ソクラテスの弁明」分析

2024年1月21日

宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

※ 2024年1月30日に第4章を追加

本稿は、プラトン著『ソクラテスの弁明・クリトン』（三嶋輝夫・田中享英訳、1998年）における、プラトン「ソクラテスの弁明」（9～102ページ）および田中享英著「『クリトン』解題」（174～199ページ）の分析をとおして、ソクラテスの議論の進め方の問題点を指摘するものである。

なお、以下の拙著

「アイデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである ～竹田青嗣著『プラトン入門』
検証 （http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf）

・・・ではソクラテスの議論における問題点、“個々の美しいものではなく「美しいものそれ自体とは何か」を探ろうとする倒錯について、

価値・理念について議論するとはどういうことなのか ～「なんのための」社会学か？
の批判的検証を中心に（<http://miya.aki.gs/miya/shakaigaku1.pdf>）

・・・では、理念について論理的に考えると言うことは実質的にどういうことなのか説明しているの、参考にしていただければ幸いである。

<目次> ()内はページ

1. 100か0思考に基づく自己否定からの洗脳プロセス (2)
2. 知っていなければ主張もできないし議論もできない (4)
3. 最終的に行きつくところは神託か：田中享英著「『クリトン』解題」分析 (6)
 - 3.1. 「よく生きる」という言語表現の拡大解釈による見せかけの普遍化
 - 3.2. 最終的には神託に行きつく？
4. ソクラテスへの妄信的な礼賛は論理的思考の欠如の現われ (8)

1. 100 か 0 思考に基づく自己否定からの洗脳プロセス

われわれのうちのいずれも美にして善なることについては何一つ知らないようなのですが、しかし、かれは知らないくせに何か知っていると思っているのに対して、私のほうは、実際、知らないとおりのままに、知っていると思ってもいいからです。(プラトン、23 ページ)

・・・ありもしない「美そのもの」「善そのもの」について知っているとか知らないとかいう議論になってしまっているのである。私たちはどういう場合に「美しい」とか「善行だ」とか判断できるかある程度”知っている”。特定の事象に出会い、それが「美しい」とか「美しくない」とか「善行だ」とか「善行ではない」とか判断くらいできる。もちろん時には判断がつかず迷ってしまうこともあるだろうし、私の知らない「美しいもの」や「善」（と思えるような事象）がひょっとしてあるかもしれない。しかし”何一つ知らない”わけではない。

より”正しい”議論であるならば、あなたの知っている「美しいもの」「善いもの」の他にも「美しいもの」「善いもの」はありうる、あるいはあなたはある特定の事象に対し「美しい」「善い」と感じているとしても、私にはそうは思えない・・・そういったより具体的な話になるはずなのだ。

「美」や「善」というものは当然一つの”存在物”ではなく、ある一連の事象に対して人々がいかに感じたのか（感情・情動）といった、一連の出来事に対する言葉であって、「美そのもの」「善そのもの」が一つの実体（あるいは事象）として現れてくるものではないのだ。

ソクラテスの議論のやり方は、ありもしない「美そのもの」「善そのもの」について”何一つ知らない”と決めつけ、人々の具体的・個別の見解を全否定する、一種の”洗脳過程”のようにも思えるのである（仮にソクラテスが権力者であればまさにそうなる）。

最も評判の高い人々がいちばん知恵に欠けているのも同然の状態にあるのに対して、かれらよりも取るに足らないと見える他の人たちのほうが、思慮深くあることに関してはまさっていると私には思われたのです。(プラトン、24 ページ)

・・・架空のものを「真理」とし、それにそぐわない人を”知恵に欠けている”と決めつけ立場の逆転を試みる手法であるように思えるのだ。

自らの「美」「善」に関する見解について、それが絶対的なものではないかもしれないという謙虚な姿勢を保つことは重要であると思う。しかし、それは「美」「善」について”何一つ知らない”と決めつけることとは全く違うのである。

真理に対し謙虚な姿勢を示すということは、知っていることを知らないということではない。私が何を知っていて何を知らないか、実際に何があって何がないのか、素直に表明す

ることではなからうか。

かれらがその作品を創作するのは知識によるのではなく、ある種の生まれ持った資質によるのであり、ちょうど神託を告げる者や預言者がそうであるように、^{かみがか}神憑りの状態で創作することを悟ったのです。実際、かれらもまた多くの立派なことを口にしはするのですが、しかし、その口にする事の何一つとして知ってはいないのです。(プラトン、25 ページ)

・・・たしかに創作そのものは理屈ではない。ただ降りてくるものであるとも言える。しかしそれが”何一つとして知ってはいない”ことにはならない。制作の時の感覚や気持ちやら、そういったものは当然第三者よりもよく”知っている”。ソクラテスの言うことは、単なる”後付け”の理屈の話でしかないのである。”何一つとして知ってはいない”という決めつけに、ソクラテスの傲慢さが見て取れる。

かれらの知識に関して何の心得もないけれども、かれらの無知に関して無知であるわけでもない状態 (プラトン、27 ページ)

・・・という姿勢そのものが真理に対しての謙虚さに欠けているように思えるのだ。

人間の知恵というものはごく僅かの価値を持つにすぎないか、何ら価値のあるものではないということ (プラトン、27～28 ページ)

・・・これもソクラテスの独断、あるいは個人的気持ちであるにすぎない。価値があるとかないとか、それはそれぞれの人の判断でしかない。ソクラテスが言っているからといって他者がそれに従う義理もないのである。

「人間たちよ、ちょうどソクラテスのように、知恵に関しては本当のところは自分は何の価値もない者だということを悟った者、まさにその者こそがおまえたちの中で最も知恵のある者なのだ」(プラトン、28 ページ)

・・・これこそ、徹底した”自己否定”から始まる”洗脳”のプロセスなのではなからうか。私たちは知っていることは知っている。知らないことは知らない。ただそれだけである。私たちの知らないことがまだたくさんあるという謙虚さは必要だが、知っていることまで否定する必要などどこにもないのである。

ソクラテスはメレトスに対し、「だれがかれら若者たちをより優れた者とするのか、言ってくれたまえ」(プラトン、33 ページ) と漠然とした問いを投げかけ (そんな問いに一言で

答えられるだろうか)、それに上手く答えられないメレトスに対し、

きみはきみがこれまで一度として若者たちのことに心を砕いたことがないということ
を十二分に証明するとともに、きみの無関心、つまりそれに関してぼくを裁きの場に引
っ張り出した事柄についてきみが何一つ関心を寄せたことがないということをはっき
り示しているのだ。(プラトン、35 ページ)

・・・というふうに一方向的に決めつけている。ちょっと答えに窮したからといって一度とし
て心を砕いたことがないとか、何一つ関心を寄せたことがないとか、ひどいいいばかりであ
る。

もちろん自らの生死がかかっている場面である。とりあえずこの場で相手を論破する必
要があったのだろう。つまり、言い合いに勝てるかどうかの問題であって、真理を扱おうと
する哲学として真正面から取り組むような議論ではそもそもないのだ。もっとも「法律だ。」
(プラトン、33 ページ) というよくわからない返答をしたメレトスもどうかと思うが。

2. 知っていなければ主張もできないし議論もできない

実際、だれ一人として死というものを知りもしなければ、ひょっとするとそれは人間に
とってありとあらゆる善いものの中でも最大の善であるかも知れないということも知
らないくせに、それが災いの中でも最大のものであるということをもるでよく知って
いるかのように恐れているのです。(プラトン、47 ページ)

・・・まさにソクラテス自身は「死」について“知っている”とでも言いたげである。もっ
とも、「死」に関しての知識がある程度なければ「討ち死にする危険」(プラトン、47 ペ
ージ) 云々の議論などできないはずである。何一つ知らなければ死に関連する議論などでき
ようはずもないのだ。

死を恐れていることが無知(プラトン、47 ページ)だと断言できるソクラテスは、他の
人よりも死について知っていると言うのだろうか? 彼は知らないと言っている。わけがわ
からない。整合性とはどこの世界の話であろうか? (※注)

結局、ソクラテスの発言は議論(というか言い合い)に勝つための、その場だけのテクニ
ックにすぎないのだ。

「君んちにいる犬見たいから今度連れて来て」と言われ、犬を連れて来て見せる。当然犬
について知っているわけである。様々な「犬」について想像をめぐらすこともできるし、「犬」
がいれば「犬だ」と指し示すこともできる。まさか犬について何一つ知らないとは言えない

であろう。もちろん犬が何を考えたり感じたりしているのかとか、“すべて”を知っているわけでもない。しかし何一つ知らないわけではない。

それでもソクラテスのように「犬とは何か」なんて（漠然とした）質問をされたらおそらく答えに窮してしまうだろう。そんな漠然とした問いに答えようがないからだ。そのような問いは学問の領域に属さないものなのだと言えよう。

犬を長い間世話してきて、いろんな犬の表情やら行動やら、様々なことを知識として得てきた人がいたとする。突然、犬を飼ったこともなく全然関わりもなかった人がやってきて「犬とは何か」と問いただす。漠然とした問いに対し答えに窮していたら、その訪問者に「あなたは犬について何一つ知らない」と断言されるのだ。腹が立つのも当然であろう。

ソクラテスは次のように主張する。

不正を犯したり、それが神であれ、人間であれ、自分よりも優れた者に従わないことが醜悪であるということは、知っているのです。（プラトン、48 ページ）

・・・では「不正」とは何か「人間」とは何か、「優れた」「優れた者」とは何か、「醜悪」とは何か・・・問いただせばきりがないであろう。

それでもソクラテス自身、そしてソクラテスの言う言葉を聞いていた人たち、皆（あるいはほとんど）がその言葉の意味を知っているからこそ、議論（あるいは言い合い）が成立するのである。たとえお互いに共感することができなくても相手が言っていることはそれなりに理解できているということなのだ。

（※注）三嶋輝夫著『ソクラテスの弁明』解題（103～118 ページ）においてもこういった不整合について議論されている。特に「*不知の自覚と知*」（三嶋、109～112 ページ）とソクラテスの政治姿勢について（三嶋、112～118 ページ）である。前者に関しては、この不整合を“難問”（三嶋、112 ページ）とし、様々な研究者たちのつじつま合わせの見解を紹介しているのだが、私見としては、単なる不整合で良いのではないかと考える。議論を完全に整合的に進めること自体、なかなか難しいことであるし、ソクラテスに至ってはそのあたり特に無頓着であるように思えるのだ。

とにもかくにも、ソクラテスを“学問的な”哲学者として考えるには無理がありすぎる。

3. 最終的に行きつくところは神託か：田中享英著『『クリトン』解題』分析

最後に、田中享英著『『クリトン』解題』（174～199 ページ）について私なりの見解を述べておく。

3.1. 「よく生きる」という言語表現の拡大解釈による見せかけの普遍化

私たちが法や道徳に従って生きなければならないのはなぜかと言えば、ただそれによってのみ私たちが幸福に生きることができるからだ、ソクラテスは言っているのである。（田中、182 ページ）

・・・これも様々な反例を挙げることができるような見解である。”のみ”と言い切る根拠は何なのであろうか？

正義しく生きている人も、不正に生きている人も、どちらも自分では、よく生きることが大事であると考えている。（田中、183 ページ）

・・・これでは「よく生きる」という言葉が”なんでもあり”状態になってしまっていないか？不正に生きていること＝よく生きること、と考える人が実際にいるのだろうか？「普遍的」（田中、183 ページ）というより、言葉の意味の拡大解釈なのではなからうか。

つまり

人は「正義しく生きる」ことによって「よく（幸福に）生きる」ことができる（田中、184～185 ページ）

・・・という説明と齟齬をきたしてしまっている。「ソクラテスは、これに同意する人間はむしろ少数であることをよく知って」（田中、185 ページ）いるとかいう問題ではなく、単なる言語表現の間の矛盾でしかない。

いずれにせよ、ソクラテスは話を極端に単純化しすぎているのである。「正義しく生きる」と「幸福に生きる」という二つの事柄が、二つの要素だけで単純につながっているわけではない。様々な場面があり、様々な要因があり、様々な人たちがいる。これを、言葉の拡大解釈によって（見せかけの）普遍化をしたところで、単なる言葉の遊びにしかならないのである。

3.2. 最終的には神託に行きつく？

現代の私たちによって本物の国家を考えることはひどく困難になってしまったように思われる。(田中、189 ページ)

・・・いったい“本物の国家”とは何なのであろうか？ 日本政府は偽の国家なのであろうか？ ここでも田中氏の恣意的な解釈が入り込んでいる。おそらくであるが、田中氏が「登山隊とか極地探検隊とかいったグループ」(田中、190 ページ) といった事例を挙げているところから見ると、国民と国家とが近い、国民が政府へ直接関与する可能性の高いような小さな国家(あるいはグループ) というものを考えているのだと推測できる。

つまり一人一人が政府の運営に対しより強い責任感や義務感やらを感じざるをえないような状況なのだろう。そういうシチュエーションの方が問題をより明確に捉えやすくなる。一方、国が大きくなると一人一人の責任感が薄れたりする、そういった説明は可能だ。ただ、それにしても田中氏の「本物」という表現は誤解を招くし、国家が大きくなったからといって責任感や義務感の問題が消滅するわけでもない。

その上で、

ソクラテスが最終的に判決に従ったのは、それを^{ただ}正義しいと認めたからであると言うべきであろう。(田中、192 ページ)

・・・結局のところ、ソクラテスがそう判断した、という事実のみが明らかなのであって、ここから何ら”普遍的”な結論はもたらされない。

ソクラテスは、国家であればどんな国家にも従うべきであり、国法であればどんな国法にも従うべきだと考えていたわけではない。(田中、192 ページ)

・・・では、従うか従わないかの基準は何なのか。「正義しい」「よい」という言葉は様々に解釈できる。言葉の拡大解釈により(見せかけの)普遍化を行ったところで、普遍的行動基準など明らかにはならないのだ。

・・・結局は、神託(現代で言えば、ただ降りて来る・現れて来る言葉や行為、情念)次第なのではなからうか。「論理的に考えてみていちばんよいと思われる言論にのみ従う」(プラトン「クリトン」、131 ページ) というのは、結局後付けの理屈付けにすぎない。

私には何か神と神格に関わりのあるもの(ダイモニオン)が生じるのです。そしてそれこそは、訴状においてもメレトスが茶化して書いたところのものなのです。それは子供の時以来私につきまとい、ある種の音声として生じるのですが、それが生じる時にはい

つでも、それが何であれ、私がまきに行おうとしていることを私に止めさせようとするのです。(プラトン「ソクラテスの弁明」、55～56 ページ)

ダイモニオンのいつもの予言は、これまでの全期間にわたって、私が何かを間違った仕方で行おうとしている場合には、そのつどきわめて頻繁に、しかもほんの些細なことにまで反対してきたのです。(前掲書、79 ページ)

今朝がた私が家を出ようとした時にも神の合図は反対しませんでしたし、こちらの裁判所にやってきて出廷した時にも、また弁論の中で私が何か言おうとしている時にも、一度も反対しなかったのです。実際、他の話をしている際には、その途中いたところで私が話すのをやめさせたのにです。(前掲書、80 ページ)

・・・理屈云々ではなく、言葉が浮かんでしまった、そういうふうに行動してしまった、話さざるをえなかった、あるいは話すのをやめてしまった、そういったいやおうなしに現れた具体的経験に行きつくのである。

ソクラテスが繰り出す論理(多くは詭弁的論理)とは、それらの行為やら情念を後付けで理屈付けした事後的解釈なのである。私たちの行為をすべて「論理的に考えてみていちばんよいと思われる言論にのみ従う」形で説明できるわけがない。それらを無理やり論理的に説明しようとしても、前章で示したような不整合が現れてしまう。不知の自覚においても、政治的姿勢においても、論理的矛盾や齟齬がどうしても現れてしまうのだ。

法の決定に従うか従わないか・・・選択の場面において何を規準に判断したのか、仮に明確な基準を持って選択したとその時は思っていたとしても、その原因は考えれば考えるほど疑う余地が出て来る。選択した事実は明確だけれども、原因というものには究極的に謎の部分が残ってしまうのである。その時できることは、後付けの正当化しかない(それが”完全に”間違っているとも言えないのであるが)。

死期が迫ったソクラテスの“幸福”の理由も、「正義の証し」(田中、197 ページ)だけで説明できるのか(「幸福」と決めつけて良いのかという問題も)。彼の生得的な性質やら、死後の世界についての興味やら、その他さまざまな要因も考えられうるのだ。

4. ソクラテスへの妄信的な礼賛は論理的思考の欠如の現われ

ソクラテスの考え方が哲学という学問の”源流”と位置付けられるのだとしたら、ソクラテス・プラトンがあいかわらず哲学者のあるべき模範的モデル(?)として考えられているのだとしたら、哲学という学問が「正しさ」に未だたどり着かないのも納得がいく。

ソクラテスが関与する議論の内容を読んで「おかしいな？」とは思わないのだろうか？ それらをまともな学問として取り扱うことに抵抗は感じないのだろうか？ どう考えても詭弁である。その詭弁を見抜けない人たちが「正しい」認識としての哲学を構築できるとは到底思えない。

極端な単純化+言葉の意味の拡大解釈は言うまでもないが、(日常生活の中で、あるいは仕事の中で積み上げてきた) 経験知の軽視あるいは否定、といった姿勢が非常に問題ではないか。

論理性(あるいは論理)というものは、私たちの日常生活における現実認識・事実認識から導かれるものだ(哲学者・論理学者は論理の根拠に関して誤解をしている)。つまり**論理を担保する根拠の軽視につながる。その結果、空想的推論が哲学理論としてまかり通ってしまうのだ**(カントやハイデガーたちの理論も同様)。そして日常性への嫌悪、日常的経験の軽視、そういった流れが現代の哲学(すべてではないかもしれないが)にも受け継がれているように思える。

不知の自覚(俗っぽく言えば無知の知)は謙虚な姿勢を表すようで、日本人の琴線に触れやすいのかもしれない。しかし、知っていることを知らないというのが謙虚さというものなのだろうか？

そしてソクラテスの不知の自覚に関する議論を見てみれば、それが(私たちが一般的に考えるような)「私たちには知らないことが多すぎる」という内容なのではなく、(そのようなものなどどこにも見つかることはない)イデア的なものについての見解だ、ということが明らかになって来る。

「不知の自覚」というよりも、「**経験知への冒流**」「**知識に対する傲慢**」という表現の方が適切ではなからうか。

※ 論理の根拠に関しては、拙著

A→Bが「正しい」とはどういうことなのか ~真理(値)表とは何なのか

http://miya.aki.gs/miya/miya_report40.pdf

命題を(論理的)トートロジーと決めつけた上でA→Bの真理値を逆算するのは正当か？

http://miya.aki.gs/miya/miya_report39.pdf

・・・などで取り扱っていますので参考にいただければと思います。